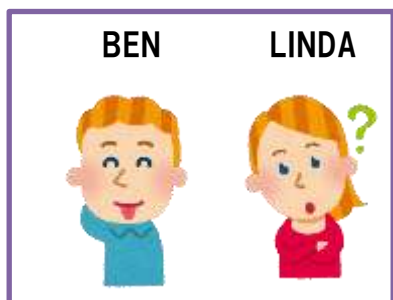


## 「マル・バツ」にチューイ！日本独特の “rebus” と非言語コミュニケーション

齊藤 悦子 教授 | 英語英文学科

第2部の最後では、**non-verbal communication** でよく使用される身体で表現する記号の中で、日本人は「世界中誰にでも通じる」と思っている、案外そうではなく、日本だけのものかもしれない、という事例について考えました。



最初にクイズをしました。

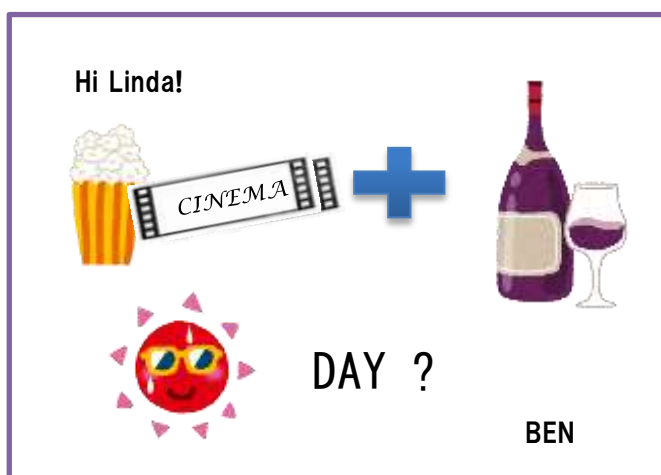
\*ベンとリンダは会社の同僚です。いつも協力して仲良く仕事をしています。ベン  
はリンダのことが好きになりました。そこで  
デートに誘いたいのですが、恥ずかしい  
ので、気楽な感じにするために絵手紙を書

くことにしました。右がその手紙です。さて、数日たって、リンダさん  
から、次のような返事が来ました。

“Hi Ben, Thanks for the  
invitation. (お誘いありが  
とう) O X .”

これは次のうち、どの意  
味でしょうか？

- 1) 映画はいいけれど、  
飲みにはいられない  
わ。
- 2) とてもうれしいわ。  
でも、日曜は予定があ  
るので、別の日にしてもらえませんか？
- 3) ありがとう。あなたが大好き！



第二部 「マル・バツ」にチューイ！日本独特の“rebus”と非言語コミュニケーション  
フロアからは、それぞれ違う回答の選択がありましたが、正解は、3番。



なぜなら、英米で手紙の最後に記号で書く時には、マルは「ハグ」（抱きしめること）バツは「キス」を意味するからです。恋人への手紙の最後に「愛を込めて」という意味で XXX とバツを3つ重ねたりします。

日本でよく「ダメ」を体で表現する時に両手をクロスさせて「バツ」を作りますが、外国人には、これが「意味不明」に感じられるようです。その実体験について大杉正明先生がお話ししてくれました。

大杉先生が英国エクセター大学に留学しておられた頃、ハートマン教授のもとで、イギリス英語の語彙研究に取り組んでおられました。ちょうど、最も権威ある英語の辞書として知られる Oxford English Dictionary (OED) の編集に参加している若い研究者たちが集まっていて、大杉先生は、彼らと毎月1回、ランチ・ミーティングを行って OED の語彙についてのディスカッションをしていました。そのランチ・ミーティングのメンバーは6人。全員が入れる席のある店を探している時に、幹事だった先生が走って行って確認すると、あいにく満席、店から出て、道の反対側にいる仲間と全身で「バツ」を作って合図すると、仲間たちは、怪訝な顔をして顔を見合わせたあと、わらわらとこちらへ向かってくる。「いや、バツだから…こっち来ても入れないから…なんで来ちゃうの？」と戸惑う先生に、仲間たちは、「どうして、急に十字架のマークを合図したの？」と聞いたそうです。大杉先生は、その時はじめて「バツ」＝「ダメ」は日本特有の“rebus”（判じ絵・記号）であることを認識したそうです。

同様に、辞書学が専門である大杉先生は、日本の英語辞書において、文法的な用例を説明する際に、文法的に間違っていて成立しない文を示す「非文」のマークに注目しました。日本で出されている英語辞書では、非文にはバツ、正しい用例にはマルがついています。欧米の英語辞書には、非文は＊マークがついています。やはり、バツはユニバーサルな rebus ではないのでした。

「欧米ではバツのマークは KISS なので、チューイしないとチューされちゃうぞ」と先生のトレードマークでもあるダジャレが炸裂したところで、「マル・バツにチューイ」編は終了となりました。